

ひと社会面

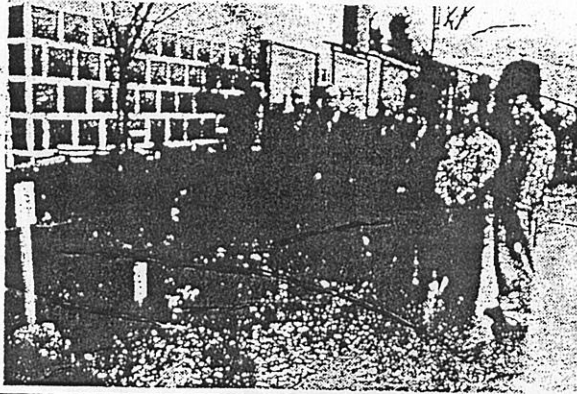


諸生党

水戸藩

の鎮魂碑建立

鶴ヶ城攻防会津藩の援軍



ゆかりの 若松に 28日に除幕

建立場所を確認する栗栖さん(左から4人目)

建立することになった。

建立するのは、地元で諸生党をはじめとする郷土史を研究している茨城県センター協同組合理事長栗栖平造さん(ハ)と水戸市緑町一ノ六ノ二、元茨城県職員(ニ)をはじめ、同党の子孫の人たちでつくる仰天会の有志。

鎮魂碑は、白虎隊をはじめの会津藩関係の資料を展示している飯盛山下の白虎隊記念館(早川広中館長)の協力で、同館前に建立する。高さ百六十六センチの黒みかげ石に、水戸藩諸生党 鎮魂碑と刻む。

水戸藩諸生党は幕末、水戸藩の内部抗争によって藩

から脱走した藩士らによってつくり、尊王攘夷(じょうい)を唱えた天狗党と対立する保守派の勢力。
一八六八(明治元)年八月、諸生党約四百人が会津を救援するため急ぎよ越後戦線から鶴ヶ城にかけつけ、西出丸や三ノ丸などに陣取って手薄な会津藩の防御に協力、ろう城しながら城を攻める西軍に反撃した。

当時、会津藩の有力部隊は城外で戦っていたため、城内を守る兵はごくわずか、諸生党の援軍がなければ鶴ヶ城は西軍攻撃の初日(八月二十三日)に落城していたという。諸生党はその後、城外各地で戦って水戸に戻ったが、やがて千葉県八日市場で全滅した。

二十八日の除幕式は午前十一時三十分から行われ、水戸から栗栖さん、仰天会員、会津から会津史談会員ら六十人が出席、完成を祝う。会津史談会の三橋正雄会長は「会津でも諸生党の活躍はあまり知られていない。今回、栗栖さんらの尽

力で会津戊辰戦争の史実が掘り起され、光が当たった」と、建立を喜んでい

百三十二年前の会津戊辰戦争で、鶴ヶ城の攻防戦に会津藩の援軍として西軍と戦った水戸藩諸生(しよせい)の鎮魂碑が二十八日、ゆかりの会津若松市にお目

見えする。水戸市の郷土史家や子孫が「明治以後、敗者の歴史の中に埋没させられた先祖の霊を会津でも弔い、さらに多くの人たちに史実を知ってほしい」と、